第818号 平成25年7月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2013年（平成25年）
7月号（No. 818）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

平成25年度通常総会
新役員を承認終了後、理事会で森武昭会長を選出

公益社団法人となって二度目の通常総会が開催された。4年の任期を終了した尾上昇会長に代わり、森武昭新会長が選出されたほか、今後に向けての様々なプランや展望が提示され、日本山岳会の将来像を描く一日となった。

平成25年度の通常総会が6月15日午後2時から、東京・六番町の主婦会館プラザエフで開かれた。会員136人が出席し、①平成24年度事業報告案、②平成24年度収支決算報告案、③平成25・26年度役員（理事・監事）承認案―について審議し、いずれも原案どおり可決承認した。

総会終了後、臨時理事会が開かれ、森武昭理事を会長に選任した。森会長は、「会の再生に向け、前会長らが育てた芽を大きくし、花を咲かせていきたい」などと、決意を表明した。

（事業報告等の詳細内容は8ページから別掲）

■尾上会長挨拶
～道半ばだが、出口が見えた

この日の総会には、3480の委任状が提出された。出席者・委任状提出者を合わせると3616人と会員総数の過半数となり、総会は有効に成立した。総会を開くために必要な最小限度の出席者／定足数は、従来「3分の1以上」だったが、新しい定款で「過半数」となった。高原三平総務担当常務理事の司会で議事を進めた。

冒頭、尾上昇会長は任期4年を振り返り次のように語った。

総会会場の様子

「長かったようであり、短かったようであり、複雑な心境だ。4年前、就任にあたり会の復興と復権をお約束した。日本山岳会は、かつて日本の登山界をリードしてきた。そのリーダーシップを取り戻したい、と思った。4年で成し遂げるのは無理な話だが、努力は惜しまなかった。評価は道半ばといったところか。少なくとも、暗いトンネルのかなたに出口が見えてきたと思う。会の力はすごい。豊富な人材があり、能力がある。質の高い人材に恵まれたことに復興・復権への道筋を見出した。新執行部に路線を継承していただいて、トンネルを抜け出せるよう願っている」

目　次

平成25年度通常総会
新役員を承認終了後、理事会で森武昭会長を選出‥ 1
『山岳』2013年・第108号のご案内‥ 5
会長の任期を終えて‥‥‥‥‥ 6
会長就任にあたって‥‥‥‥‥ 7
平成24年度事業報告　‥‥‥‥ 8
平成24年度決算報告　‥‥‥‥ 11
平成25・26年度役員（理事・監事）‥ 12
平成25年度事業計画及び収支予算‥ 12
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
　集会委員会
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
　越後支部
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 16
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 20
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 20
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 21
INFORMATION　‥‥‥‥‥‥ 21
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥ 22
日本山岳会所蔵資料紹介 No.4-①‥ 23

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木‥‥‥‥‥‥‥10～20時
水・金‥‥‥‥‥‥‥‥‥13～20時
第2、第4土曜日‥‥‥‥‥‥閉室
第1、第3、第5土曜日‥‥10～18時
夏季休室　‥‥‥‥ 8月10日～18日

■事業報告・収支決算
～本支部合わせ５１２万円の黒字

議案審議を開始した。高原常務理事が事業報告を、小林義亮財務担当常務理事が収支決算を説明した。

〈事業報告〉

コンプライアンスの徹底とガバナンスの確立に邁進するため「法人運営適正化プロジェクトチーム」を発足させた。全国31支部とのコミュニケーションの円滑化のため支部長会議、支部事務局長会議の充実を図った。プロジェクトチームは、下期から常設の「公益法人運営委員会」に改組した。

事業充実の面では、喫緊の課題であった若年層への総合的対策として、ＪＡＣ-ＹＯＵＴＨの拡充改組を行ない、推進体制の見直しを行なった。活動は雪山天気予報の充実、雪崩講習会および冬山登山指導事業の積極的な展開など。「山の日」制定プロジェクトについては、10月に東京代々木のオリンピックセンターで『「山の日」ネットワーク東京会議』を開催し、6月の第1日曜日を全国一斉の「山の日」にしようと呼びかけた。

海外登山助成金については8隊に助成、それぞれの隊が大きな成果を挙げた。

一般登山者を対象とする登山教室は希望者も多く、現在13支部で行なわれている。

山岳研究調査事業については、上高地山岳研究所を利用した登山活動、小規模水力発電の研究などを行なっており、山研が活発な活動拠点として機能している。山岳環境の保全は、山地が国土の70パーセントを占め、そこを活動のフィールドとする本会にとっては、課題の一つである。「高尾の森づくりの会」のほか、全国11支部において相互に連絡を取りつつ森づくりに取り組んでいる。毎年行なわれている自然保護全国集会は、群馬・片品村で開催され、地元を巻き込んでの意見交換を行なうことができた。

〈会員動向〉

ここ10年以上にわたって、高齢化・会員減少が続いていたが、会員数は平成25年3月現在で５０８３名。平均年齢は67歳であり、ここ3年間は、ほぼ横ばいとなっている。それまでは毎年１００名程度減少し、平均年齢も1歳ずつ高くなっていた。現在は歯止めが掛かりつつあり、24年度は２３６名の新入会員の入会があった。

懇親会で挨拶する森武昭新会長

〈収支決算〉

経常収益は総額９９５５万円。入会金収入が前年度比１１３万円増加したが、会費収入が１７９万円減となり、両者合わせて65万円の微減となった。寄付金や補助金などの収入が大幅な増加となったことが特筆される。２２５２万円だった。継続的支援分もあるものの、広島支部ルーム取得にかかる寄付金１０３７万円が大きく、ほかにも支部周年行事、特定の支部事業（海外登山、分水嶺踏破、登山教室など）に対して寄付金が寄せられた。この傾向は今後における本会の飛躍、支部活性化に大きく繋がっていくものと考えられる。

山研使用料が大きく増え、２４０万円と過去最高となった。前年度は天候不順、道路決壊などの影響で１２７万円にとどまった。年次晩餐会の会費収入は６１５万円。

支出総額は９４４２万円と、前年度比７７８万円の増加。これらの結果、差し引き５１２万円の黒字となった。本支部に分けると、本部は４６７万円の赤字。支部は広島支部の寄付金収入が大きく寄与し９７９万円の黒字だった。広島支部の寄付はルーム取得に伴うもので、毎年36万円の減価償却として負担されていく。

本部収支は、前年度の92万円の黒字から一転して再び赤字となったが、特別予算を組み込んだＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢへの支出４９０万円、支部の新入会員増加に伴う運営交付金、事業補助金の増加２４１万円が大きな要因。

一般会計の持ち出しはなく、まずまずの結果だった。ここ数年実行を見送った余剰金による長期計画準備金の積み増し３８１万円（山岳研究所減価償却費相当額）を行なうことができた。

■挙手により賛成多数で承認

これらに対し平井拓雄監事から収支計算書等が正確かつ妥当であ

り、また理事の業務執行が誠実に行なわれたことを認める監査報告があった。

質疑応答のあと、挙手多数によりこれらの議案を承認した。従来は拍手でもって承認したが、公益社団法人となり、承認は挙手によるものとされた。尾上議長が「賛成の方は手を挙げてください」の発言に、一斉に手が挙がった。確かに、このほうが賛否を確認しやすい。

■平成25・26年度役員

平成25・26年度の役員が選出された。候補は4月10日の理事会で尾上会長が提案し承認されている。15人の候補者のうち10人が新任だ。理事は、定款細則で「選任時において満70歳を超えないものとする」と規定されている。いずれも挙手多数で承認された。新役員は次のとおり。（カッコ内は新任・再任の区別、年齢）

▽理事＝大槻利行（新・50）、落合正治（新・64）、勝山康雄（新・61）、川瀬恵一（再・53）、黒川恵（新・63）、佐藤守（新・65）、節田重節（再・70）、高原三平（再・65）、直江俊弐（新・36）、野口いづみ（新・64）、古野淳（再・52）、森武昭（再・68）、山賀純一（新・45）、山田和人（新・53）、吉川正幸（新・64）、

▽監事＝浜崎一成（再・81）、吉永英明（新・71）

■質疑応答

俵山守男（9742）：①高尾の森づくりは、どうして常務理事会の所属になっているのか、②役員候補は、どういう理由で選任したか。略歴を出してもらったらどうか。

吉永英明副会長：森づくり事業は、それぞれの支部の事業として推進することになっている。高尾は東京多摩支部の区域だが、支部設立間がないので当分の間、常務理事会が預かっている。

尾上会長：半年前から理事会などで、日本山岳会役員にふさわしい人の推薦をお願いしてきた。その推薦者から会長が判断し、4月の理事会で承認してもらった。それぞれに面接した。略歴については次期執行部に申し送る。

長田義則（5465）：除籍対象者へのサービスはどのようにしているのか。財政圧迫の要因になっていないか。

高原常務理事：まず除籍対象者を総会での決議事項から外したことを説明したい。新しい定款で、3ヵ年以上年会費を滞納し、理事会の請求があっても納付を怠ったとき会員資格を喪失すると規定、自動的に除籍となることとした。従来は総会での決議を要したが、決議の必要をなくした。リストを配布したのは注意を喚起するためだ。

吉永副会長：定款細則で、前年度の会費未納者には、機関誌『山岳』および会報「山」を送付しない。滞納2年目から3年目は、年次晩餐会、総会の通知、会費納入督促を除くすべての通知を止める、3年間未納の者は除籍すると規定している。

新たな会長、副会長、常任理事が檀上で紹介される

■報告事項

～平成25年度事業計画・収支予算

従来は、事業計画案・収支予算案についても総会で審議しなければならなかった。新しい定款は「毎事業年度開始の日の前日までに、会長が作成し、理事会の承認を受けなければならない」とし「総会に報告を行なう」と規定している。25年度計画・予算案は3月13日の理事会で承認された。

〔事業計画〕

おおむね24年度と同様の事業を行なうが、特に2年目となるＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ事業に力を入れる。これによって若年会員の入会を促進する。登山講習会の開催、冬山天気予報の配信、日中韓学生交流登山の実施など。50人の入会を目標とする。

「山の日」制定プロジェクトは、ほかの山岳団体と協力して推進体制をとる。ルームに開設している「山岳図書館」について、その運営を担っている図書管理委員会と山岳図書の研究を担当する「図書委員会」を統合し、効率的な運営で利用者の拡大を目指す。全国で実施されている森づくり事業を推進し、よ

り全国的な規模での展開を目指していく。

共益事業は、年次晩餐会の開催、会報「山」の発行、会員向け登山指導など。

〔収支予算〕

財務収支は、事業経費の需要増を反映して、年々逼迫感を増しつつある。会費増に努めるとともに、支出を抑え、基礎的収支（プライマリーバランス）に留意した財務運営を心がける。

経常収益は、会費収入５７００万円、入会金収入３３０万円のほか、森づくり事業に対する補助金・助成金を主とする受取寄付金等として１２００万円程度を計上し、年次晩餐会収益を含む総額を８８８０万円とした。

経常費用は、機関誌『山岳』、会員向けの会報「山」などの出版事業費に１３５０万円、支部事業費に１８２４万円、森づくり事業費に５００万円など。若手会員増強のためのＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ強化の特別予算５００万円を計上。減価償却費を含む事業費は総額７１５６万円とした。

■除籍対象者
～25年度は70会員

平成25年度の除籍対象者は67人・3団体。会費を23・24年度の2年間滞納している会員が対象となる。新しい規約で総会の決議は必要がなくなったが、注意を喚起するため、総会出席者にリストを配布することとした。

■10支部で支部長交代

全国31支部のうち10支部で支部長が交代した。新しい支部長が紹介された。大きな拍手に迎えられ、会場前に進んだ。「若返りということで……」などと、支部活性化の抱負を語った。新支部長は次のとおり。

北海道・西山泰正／宮城・佐藤昭次郎／山形・粕谷俊矩／福島・小林正彦／千葉・諏訪吉春／越後・橋本正巳／岐阜・高木基揚／静岡・大島康弘／山陰・中井俊一／広島・兼森志郎

■臨時理事会・懇親会開く

総会終了後、4時から懇親会を開いた。同時に別室で臨時理事会が開かれ、会長・副会長らを選出した。会長には森武昭理事が選ばれた。第24代会長である。

総会後に開催された、支部長会議の模様

会長・森武昭／副会長・節田重節、黒川惠、古野淳／常務理事・吉川正幸、高原三平、佐藤守

新役員が懇親会に姿を現した。大きな拍手と声援が広がった。尾上前会長が音頭をとって乾杯し、和やかな歓談を続けた。森会長は次のように挨拶した。

「大学山岳部の出身でないし、たいした山行歴もない。会の長い歴史のなかで、これまでとまったく違った会長だろう。サプライズ人事だ。尾上会長から2カ月にわたって依頼され、みなさんに応援していただくことを前提に引き受けた。閉塞状態だった会の再生を目指し、前会長らが育てた芽を大きくし着実に花を咲かせていきたい。そのために会費に見合ったサービスを提供する。支部を活性化し会員を増やすとともに質を高める。ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢを充実し若い会員の増強、また次期リーダーの育成を図る。2年後に創立１１０周年を迎える。記念事業実行委員長は尾上前会長にお願いしたい。財政基盤を強化したい。できれば数値目標をつくりたい」

（文＝髙橋重之／写真＝廣田　博）

支部長会議開く
～群馬支部が設立総会

平成25年度第1回支部長会議が、通常総会に先立って午前10時30分から日本山岳会１０４会議室で開かれた。全国31支部から、それぞれの支部の現況・事業計画を書類提出してもらい、本部からはプロジェクトチームの活動状況などを説明した。

尾上会長は、在任4年を振り返って挨拶し、そのなかで支部長に対し「4つのことをお願いしたい。第1は、ルームをつくることだ。い

つでも誰でも自由に出入りできるようにしてほしい。第2に支部山行をどんどんやってほしい。第3は支部内に同好会をつくってほしい。新たな展開がある。最後に、対外的な事業を行なってほしい。そうすれば必ず支部は活性化する。支部会員は増える」などと訴えた。

続いて小林常務理事らから、支部に対する運営交付金の支給、「日本三百名山登山ガイドブック」「山の日」制定などについて説明があり、また全国32番目の支部として群馬支部が7月に発足することが紹介された。設立総会が13日に前橋で行なわれる。

ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢからは、9月と来年3月に第1回全国安全登山実技指導講習会を開催する計画が披露され、支部会員の参加を呼びかけた。また、子どもゆめ基金の助成を得て立ち上げるウェブサイト「親子で楽しむ山登り」、国土地理院と全国自治体が連携して行なう登山道調査への参加などについて協力要請があった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新役員のプロフィールは、8月号以降に順次ご紹介します。

『山岳』2013年・第108号のご案内

お待たせしました。本年の機関誌『山岳』の発刊は、７月下旬となります。一部文字を大きくし、読みやすくしました。また、新しく「委員会の活動報告」を加えましたので、ご覧ください。

記　録

◆キャシャール南ピラー初登攀　（花谷泰広）

ネパール、クーンブ・ヒマールの難峰、キャシャール（６７７０㍍）南ピラーを初登攀した記録。「ザ・ニマ・ライン」と命名。ニマとはシェルパ語で太陽の意。

◆パタゴニア・ポローニ縦走とフィッツロイ縦走トライ　（横山勝丘・増本亮）

印象的な針峰のポローニ縦走と、７つあるピークを北から南へ繋げるフィッツロイ縦走（ケアベア・トラバース第５登）にトライ。さらにポインセノット南西壁ジャッジメント・デイ第２登（フリー初登）の記録。

◆未開の地・ザンスカールの未踏峰に立つ　（2012年　日本山岳会学生部ザンスカール遠征隊）

「未開の地の未踏峰に、遠征未経験者のみで挑んだ」学生たちの記録。標高は低いが、ＰＴ６１６５に初登頂できた喜びを素直に表す、初々しさが好ましい。

調査・研究

◆立山連峰の積雪と氷河　（飯田肇・福井幸太郎）

立山連峰東面に分布する多年性雪渓（万年雪）は、日本で唯一の現存する氷河だった。立山カルデラ砂防博物館の研究成果を、カラー写真や図版を駆使して分かりやすく解説する。

◆未踏の岩峰、禁断の山塊――四川省西部高地2012秋　（中村　保）

「最後の辺境」チベット・アルプスを精力的に調査されている中村さんのレポート。今回は「将来のアルパイン・パラダイス」沙魯里山・岡嘎山群と「チベット族の聖山」工卡拉山・卡洼洛日山塊。

読　物

◆河口慧海を支えた財界人とその時代　（藤本慶光）

チベットから持ち帰った仏教経典を翻訳して、早く日本人に広めたいと願う慧海の「経典翻訳プロジェクト」を支援した何人かの財界人がいた。慧海の情熱とそれに応えた人々の姿を追う。

◆俳句と登山　（広渡敬雄）

“俳句界の芥川賞”といわれる第58回「角川俳句賞」を受賞された広渡さんが綴る、俳句との出会い、山岳俳句の系譜、私の山岳俳句、など。

◆静観的登山者生涯の山岳詩　（倉知敬）

闘争的登攀者たることを身上とする一方、鋭敏な詩的感覚を持つロマンチストでもあった松永敏郎さん。三十余年にわたって年賀状として送り続けられた年頭短歌集を一挙掲載。

◆大正２年夏、上高地　（関塚貞亨）

大正２（１９１３）年、夏の上高地温泉には、ウェストン夫妻とともに日本山岳会草創期の会員が滞在、第二世代や文化人との邂逅もあり、交流や興味深いエピソードが生まれた。

◆武田久吉の書簡をめぐって　（湯口康雄）

日本山岳会創立発起人の一人で、植物学者として著名な武田久吉と富山県在住で初期の山岳会員である吉澤庄作との、高山植物をめぐる交流が今に蘇る。

図書紹介　追悼
会務報告　支部の活動報告
委員会の活動報告
山岳図書目録

（担当理事／節田重節）

ルックバック

会長の任期を終えて

会員番号６００１　尾上　昇

先月の6月15日開催の総会をもちまして、定款の定めにより、会長の職を辞しました。4年間という短い期間ではありましたが、会の運営を執行する理事会や委員会の皆様方、そして各プロジェクトチームの皆様方、さらには多くの会員の皆様方のご尽力を得まして、なんとか任期を全うできました。衷心より御礼申し上げます。

2期4年間の任期でしたが、この4年間を振り返ってみますと、大変長かったような短かったような緊張の連続でした。これは、昨今のＪＡＣが抱える諸問題が山積していて、しかも短期間で解決を要する案件ばかりで、一時も気の休まる暇がなかったことに起因します。

私は、会長就任に際して問題解決のためのマニフェストを提示させていただきました。キーワードは、ＪＡＣの復興と復権です。復興とは、かつてのＪＡＣの持っていたパワー、すなわち会の力、会勢の復活です。また、復権は、これもかつてＪＡＣが日本の登山界で指導する役割を担っていたリーダーシップを再び取り戻そうというものです。

ＪＡＣの会勢の衰えは、20年ほど前から顕著になってきています。ここ数年は、危機感さえ抱かせる状況に陥っていることは、衆目の一致するところです。具体的には、会員の高齢化、若年会員層の不在、会員数の減少です。また、これらのことから財務状況の悪化も招いています。いずれも緊急に対応を要する重要案件ばかりです。

こうしたことは、以前から多くの会員の指摘するところでありましたが、誰も手を付けることなく放置しておいたつけが廻ったものだと申せましょう。私は、これらの案件の解決の施策として、それぞれに対処する、プロジェクトチームを設置しました。ＪＡＣＹＯＵＴＨ ＰＴや支部活性化ＰＴなどです。

これ以外にも、国の公益法人制度改革に伴う新しい法人への移行の対応も急を要していました。これに対しても公益法人制度検討ＰＴを立ち上げました。

さて、この4年間の成果と申しますか総括を申し上げますと、総体的には、自己採点しますとなんとか及第点はいただけたのではないかと自負しています。まずは会勢の立て直しですが、ＪＡＣＹＯＵＴＨ ＰＴを中心とする関係部署の懸命な努力と特別予算も投じた結果、60名に及ぶ若い会員が仲間に加わってくれました。また、新入会員の入会者数も、毎年の退会者数とほぼ同じとなり、会員の減少傾向に歯止めがかかりました。

4年前は、真っ暗でトンネルの出口がまるで見えませんでした。まだまだではありましょうが、やっと出口にその燭光を見定めることができたと申せましょう。財務状況についても担当部署の厳しい査定の見直しの結果、収支のバランスが保てるまでに改善されました。公益法人制度改革につきましては、公益社団法人への移行を選択しました。申すまでもなく、その後の推移を見守っても、選択に過ちがなかったことを確信しています。

なんとか及第点、と自己採点させていただきましたが、その及第点をいただける最大の要因は、ＪＡＣのマンパワーの凄さにあります。私ごとき浅学非才な者を支えていただき、個々の立場を充分理解され能力をいかんなく発揮していただいたからに外なりません。改めましてＪＡＣ会員の皆様の質の高さ、能力の高さ、そして人材の豊富さに敬意を表するものです。

最初に申し上げましたＪＡＣの復興と復権はまだ道半ばですが、橋頭堡は築かせていただいたつもりです。今後は、この橋頭堡から反転攻勢を仕掛けて欲しいと思います。幸いなことに、森新会長とは2年間、業務執行に苦労を共にしてまいりました。充分私の意図としているところは、ご理解をいただいているものと思慮しています。新・森執行部に今後の事業展開を大いに期待したいと思います。

もう一点、会の運営とは異なりますが、私に与えられた課題として、宮下元会長からの申し送り事項があります。それは「山の日」制定への取り組みです。この命を受けて、山岳4団体に働きかけ、Ｊ

（22ページへ続く）

ルックアウト

会長就任にあたって

会員番号９６２０　森　武昭

このたび、総会で理事に選出され、その後の臨時理事会で会長職に選任されました。正直申し上げまして、大学山岳部出身でもないし、大した山歴も持ち合わせていない私のような者で職責をまっとうできるか大変悩みました。当然、お話をいただいた当初から辞退し続けてきたのですが、いろいろな経過があり、皆様に協力していただけることを前提に引き受けさせていただいた次第です。

とは言っても、引き受ける以上は、役員の皆様はもとより会員の皆様のサポートが受けられるように最善の努力をしていく所存です。その根底にあるのは、山や自然を愛する気持ちと、ＪＡＣが今まで私を育ててくれたことに対し、少しでも恩返しできれば、との思いです。

私は直近４年間を、常任評議員・常務理事として会務に携わってきましたので、当会の現状と問題点については私なりに理解しているつもりです。尾上前会長は、ＪＡＣが直面している問題に英断をもって正面から取り組み、明るい兆しが見えたところで任期満了となってしまいました。私は、当然この路線を継承します。そして２年間の任期中に、この芽をより確実なものとするとともに、次世代にバトンタッチしていくことが任務と心得ています。具体的には、次の４項目を重要課題として取り組むつもりです。

第１の課題は、５０００人強の会員からいただいている会費に見合った多様なニーズに、いかに応えていくかだと思います。その大きな柱の一つが、支部の活性化です。今までは支部数を増やすことに力点が置かれてきましたが、さらに活動の質を高めるための方策を検討していきたいと思っています。会員サービスについても検討が緒についたところですので、具体化していきたいと思っています。これらに関しては引き続き「支部活性化ＰＴ」と、「収益事業・会員サービス事業検討ＰＴ」が中心となって推進して参ります。

第２の課題は、ＪＡＣが直面している最重要課題、言うまでもなく将来を担う若手会員の増強と先鋭的登山を担う次期リーダーの養成です。前者に関しては、39歳以下の会員がこの２年間で倍に増えています。これをさらに伸ばしていくため、ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ内に青年部・学生部と並んで、ワンダーフォーゲル（ＷＶ）部をすでに設置しており、これを足場にして会員増強に取り組んでいく考えです。また、次期リーダーの養成についても青年部や学生部の独自の取り組みのほかに、独立行政法人の国立登山研修所との連携など外部とも協調して実施していくことを計画しています。ここ２～３年で成長著しい若者も出てきており、時間はかかりますが着実に芽は育っています。今後もＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢについては、理事会全体でサポートし、所期の目的を果たす所存です。

第３の課題は、２年後に迎える「日本山岳会創立１１０周年」の記念事業です。私としてはＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢと支部の活性化に資するとともに、当会の有している人材を活かした企画を早急に検討したいと思っています。すでに、新理事会で実行委員会の立ち上げおよび尾上前会長の委員長就任が承認され、動き出しています。

第４の課題は、当会の財政基盤の確立です。ここ２年間、会員の平均年齢はほぼ67歳で推移していますが、依然として高齢者が大半を占めていることに変わりはなく、財政基盤は脆弱な状態にあります。この方策としては、会員増強、事業収入の増加、支出の削減の３点に集約されます。これらは第１と第２の課題とも密接に関連しており、できれば数値目標を設定するとともに、当会の中期的な展望を打ち出せればと願っているところです。これらの検討のためのＰＴも、立ち上げることが理事会で承認されています。

このほかにも、「山の日」制定、国内の山岳団体との連携、グローバル化対応、ＪＡＣのもう一つの財産である文化活動の充実などの課題にも、上記４課題と合わせて取り組んでいきたいと思っています。

会員の皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いして、会長就任にあたっての所信表明とさせていただきます。

別表

事業名	支部名 委員会名	事業内容
Ⅰ-6 シンポジウム・講演会の開催	茨城	講師を外部または会員に依頼し、山岳、自然などに関する講演を実施。　4月、6月、9月、11月、1月の5回実施した。一般参加者は年間 55名
	栃木	「夏山登山の夕べ」を7月に開催し山岳映画と講演会を実施した。80名参加。
	埼玉	埼玉県教育委員会・埼玉新聞社・埼玉県山岳連盟の後援を得て山岳気象の基本知識や埼玉県山岳救助助隊による実際の事例の講演を年3回実施した。テーマは「山岳気象」68名参加、「山岳遭難」69名参加、「心肺蘇生とAED」13名参加。
	東京多摩	講演会開催。10月羽田栄治氏、1月田邊壽氏の2回開催。315名参加(一般159名)。
	越後	毎年7月25日に新潟県登山祭として高頭祭を実施している。本年は　支部参加者60名、一般参加者50名。松田雄一名誉会員の記念講演、その後弥彦山山頂で新潟県登山祭を実施した。支部会員による弥彦山清掃登山も実施。
	富山	山岳講演会　「ﾈﾊﾞｰﾙ･ﾋﾏﾗﾔへ～夢の架け橋20年～」を平成25年2月15日、富山県民会館で実施、一般参加者54名。　講師:辻斉(富山支部会員)
	岐阜	槍ヶ岳山荘の穂苅康治を招聘して、支部創立40周年記念に合わせて　「山岳講演会」を開催した。一般参加者を含めて240名の聴講者であった。
	静岡	一般公開ﾊｲｷﾝｸﾞｾﾐﾅｰ「座学、実技」ｾｯﾄで3回実施、第1回5月「読図」12名　大棚山～中村山8名、第2回6月「天気の予測」8名。　突先山～大山11名、第3回10月「トラブル･遭難対策」9名、初冬の富士登山9名(支部会員延べ34名参加+打合せ会議3回)。
	京都滋賀	京都新聞及び京都府、滋賀県山岳連盟の後援を得て「登山活動、登山文化」啓蒙のための講演会を実施。　2012年10月17日（水）　山水会講演　「アコンカグア登頂」　京都府立大学山岳部18名。　2013年2月20日（水）山水会講演「一等三角点研究會と今西先生」一等三角点研究會　40名。
	関西	「著者と語る会」年1回、大阪府立図書館にて、山岳図書の著者による講演会を実施した。今年度は11月17日実施で45名参加。
	四国	登山教室の記念講演として、開講時に①松浦輝夫会員（エベレスト日本人初登頂者)、年度末時に②渡邉玉枝会員(エベレスト女性最高年齢登頂者）の講演会を開催した。参加者は①会員15名、会員外45名②会員19名、会員外66名
Ⅰ-7 「山の日」制定プロジェクト	福島	磐梯山において「山の日」のPR資料配布と清掃登山を実施した。
	山梨	「第8回山の博覧会」南アルプス特集Ⅱ実施。7月7日実施し一般参加者400名、支部員30名。山梨学院大学メモリアルホールで開催。　「山の日」制定関連で山梨県やまなし山の日実行委員会、山梨学院生涯学習センターが共催。講師3名による講演、渡邉玉枝さんのエベレスト登頂報告など登山振興・山岳文化の啓発を行なう。
	信濃	6月3日に上高地ウェストン碑前において「ウェストン祭」を実施した。山の美しさをたたえ登山の安全を祈るためのイベント。
	福岡	「岳人のつどい」山の映画上映と解説。平成24年2月12日（火）14:00 ～ 16:00。場所:太宰府館まほろばホール、一般参加者数:78名。一般対象に映画「マナスルに立つ」上映と解説を行なった。
	「山の日」制定PT	「岳都・松本　山岳フォーラム」（10月)、「やまなし山の博覧会」（7月)ほか、関連イベントを支援。

PT;プロジェクトチーム

事業名	支部名 委員会名	事業内容
Ⅰ-8 インターネットによる情報提供事業	京都滋賀	支部「ホームページ」による通年の安全登山の啓蒙、登山文化の継承活動。携帯電話等による「登山計画書」の提出、遭難時の「緊急通報システム」発信活動。
Ⅰ-9 登山教室の実施	宮城	大学のワンゲル部等の若年者に対する技術講習会を実施。一般登山者を対象とした支部会員の企画による「公募登山」を7月,10月,3月に実施した。登山に先立ち,事前に別会場にて登山講習会も実施した。
	山形	第1回公募による登山指導　『庄内海岸山脈を歩く』4月29日　鶴岡市草井谷～荒倉山～由良海岸、一般参加21名。第2回公募による登山指導『葉山縦走登山』10月21日　寒河江市畑（はた）～葉山主稜線～大円院趾、一般32名参加。
	東京多摩	立川市との共催で初心者登山教室を6月～ 8月の3 ヶ月間開催。講座3回、登山実習3回実施。受講生は29名。10月からは初心者登山教室卒業生対象に初級登山教室を開催。期間は1年半とし、自立した登山者を育成し、地域における登山愛好者の増加を図る、受講生25名。

第1号議案 平成24年度事業報告

要　旨

＜概要＞

平成20年12月1日、公益法人制度改革３法が施行された。日本山岳会はそれに先立ち平成19年6月の理事会において、公益法人化プロジェクトチームの設置が承認され、直ちに検討を開始した。その後、総会議決を経て平成23年10月24日、内閣府に対し公益認定申請を行なった。

平成24年3月7日の公益認定等委員会から内閣総理大臣への公益認定の答申がなされ、同年４月１日、社団法人日本山岳会の解散登記及び公益社団法人日本山岳会の設立登記を行なった。

本年度は、新制度に関する諸問題を、民間公益活動の視点から活動を行うとともに、円滑な新制度への移行に向けた活動に全力を挙げて取り組んだ。

第一にコンプライアンスの徹底とガバナンスの確立に邁進するため、新法人の発足に合わせ「法人運営適正化プロジェクトチーム」を発足させ、各種規程類の整備を進めるとともに、全国31支部とのコミュニケーションの円滑化のため支部長会議、支部事務局長会議の充実を図った。

さらに公益法人化に伴う会計処理の確実化、各種寄付の増加に対応するための必要なマニュアル類の整備に務めた。

以上に並行して事業計画、事業報告の精緻化、決算書類の複雑化に対応するため、下期からは「法人運営適正化プロジェクトチーム」を常設の「公益法人運営委員会」に改組した。

一方、事業充実の面では、Ⅰ登山振興事業については、喫緊の課題であった若年層への総合的対策として、YOUTH CLUBの拡充改組を行ない、推進体制の見直しを行なった。具体的には雪山天気予報の充実、雪崩講習会及び冬山登山指導事業の積極的な展開など従来にも増して活性化を図ることが出来た。

他の山岳団体と協同して進めている「山の日」制定プロジェクトについては、10月3日に東京代々木のオリンピックセンターにおいて『「山の日」ネットワーク東京会議』を開催し、６月の第１日曜日を全国一斉の「山の日」にしようと呼びかけた。これにより、「山の日」制定運動は５団体の枠を超えて底辺を広げ、全国的な規模の「山の日制定全国協議会」（仮称）に進む確かな足がかりを得ている。

海外登山基金については8隊に助成、それぞれの隊が大きな成果を挙げて来た。

一般登山者を対象とする登山教室については昨今の登山ブームの影響によると思われるが希望者も多く、形態は様々であるが現在13支部で行なわれている。

身体障害者支援登山も当初はごく一部の支部で始められたが、現在は視覚障害者(主として全盲者)、知的発達障害児及び自閉症者などが健常者と同じように登山を楽しむことを支援し、身体障害者の心身の健康維持に貢献することを目的としている事業で4支部で実施している。

Ⅱ山岳研究調査事業については、上高地山岳研究所を利用した上高地における各種登山活動、小規模水力発電の研究などを行っており、上高地山岳研究所が活発な活動拠点として機能している。

Ⅲ山岳環境保全事業については、山地が国土の70％を占める我国において、そこを活動のフィールドとする本会にとっては、山岳地域の環境保護は課題の一つである。「高尾の森づくりの会」が高尾の森で小学生から大人までを対象にそれぞれ対象者の要望に応じた森づくり活動を進めているだけでなく、「三宅島」、「新潟県粟島」、「気仙沼大島」等での活動にも取り組んでいる。それとは別に全国11支部においても相互に連絡を取りつつ森づくりに取り組んでいる。

毎年行われている全国自然保護集会は片品村で開催され、地元を巻き込んでの意見交換を行うことが出来た。また、上高地においても一般観光客に対して山岳環境保全のPRや上高地内を案内し、自然観察を行うネイチャーガイドを実施した。

さらに、公益法人化に伴い寄付金についても多くの申し出でがあり付属明細書に記載のとおり総額で2,200万円の実績があり、予想以上の成果を得ただけでなく、遺産相続に伴う山林の寄贈があった。

支部及び委員会の事業内容は別表に記載した。

＜会員動向＞

本会はここ10年以上にわたって、高齢化、会員減少が続いていたが、会員数は平成25年3月現在5083名、平均年齢67歳であり、ここ３年間は、ほぼ横ばいとなっている。それまでは毎年100名程度減少し平均年齢も１歳ずつ高くなっていたが、現在は概ね歯止めが掛かりつつあり、24年度は236名の新入会員の入会があった。

＊「事業報告書本文」の記載は省略した。日本山岳会ホームページを参照して下さい。

Ⅰ-15 幼稚園児から中学生までの体験登山	四国	徳島県ボーイスカウト連盟と協力し、支部会員が管理する菅生ロッジにおいてキャンプを行なった。翌日の剣山登山は大雨のため中止した。会員10名、会員外45名。
	東九州	「青少年体験登山大会」開催。主に青少年を対象とし、一般参加者も受け入れて初心者向けの体験登山を実施、7月22日(日)、場所　久住山、今年で11回目。
	宮崎	「こども登山教室」毎年夏休み期間中に実施、本年は小学生14人を支部会員19人が指導して、登山・創作・野外活動など自然体験活動を通じ、自然との共存共栄を図り、自然愛護の心、団結・協調性、忍耐力などの育成に努めた。

事業名	支部名 委員会名	事業内容
Ⅰ-16 登山道整備	岩手	焼石岳清掃登山　6月16日、支部会員9名、会員以外1名参加。
	秋田	「太平山歩道整備」11月17日、歩道の刈り払い、案内板等の設置を行なった。
	福島	吾妻連峰でも登山者が多い東吾妻山の登山道で、ヤブの刈り取りや倒木の除去を継続的に実施、平成24年度は5回目、年1回、7月に実施した。
	栃木	「日光山系清掃登山」を実施。
	埼玉	12月8 ～ 9日に天覧山と父不見山に2日に渡って登山道の清掃登山を実施した。
	千葉	「房総半島分水嶺踏査」　平成21年より継続して房総半島の分水嶺を踏査、年6回実施した。 一般参加者本年18名
	東京多摩	「東京都県分境嶺踏査山行」を計画的に実施している。 平成24年度は踏査最終年、5月雲取山～長沢背稜～日原、7月棒ノ折山～一杯水避難小屋、11月棒ノ折山～小沢峠及び11月大寺山～入小沢の峰～三頭山と結び踏査を終了した、4回実施し、延べ90名参加(一般参加者は18名)。
	富山	「高頭山」登山道整備」　5月19日に実施。「播隆祭」記念登山に先立ち、支部会員が登山道整備を行なった。
	石川	歴史ある往年の廃道を復活・整備し、地元集落や登山関係者に貢献(金沢市内1ルート、 白山市内2ルート、 加賀市内1ルート　計4ルートで、6月と7月、8月、10月に実施)。
	福井	6月24日荒島岳にて清掃登山を行なった、会員7名と一般1名の参加。
	関西	六甲東お多福山復元化活動に参加。大阪府や各市町村が制定している自然歩道を、各自治体と連携して、道標整備や登山道の補修を行なった。
	広島	高岳山頂付近の景観回復及び環境整備として、山頂周辺の樹木を伐採、除草した(12月 20名)。
	四国	7月に旧高ノ瀬小屋跡のゴミ収拾、11月に天狗峠周辺でケルン積、登山道の整備を行なった。
	北九州	通常会員、支部友、一般を対象に21名の参加を得て、英彦山の登山道の清掃登山を5月26日に実施した。
	熊本	保全と清掃を実施するため「森林保全巡視登山」を4月と10月に実施、一般募集。　第1回森林保全巡視(清掃)登山　4月22日阿蘇外輪山「鞍岳」「ツームシ山」参加者9名、　雨天のため参加者は少なかったが、登山路の崩壊もなく、ゴミ等もなかった。第2回森林保全巡視(清掃)登山　五家荘「大金峰山」「小金峰山」　参加者15名。
	東九州	10月21日　九重山系・平治岳登山道の清掃登山を支部単独の行動として実施した。

事業名	支部名 委員会名	事業内容
Ⅰ-17 山岳自然観察会の実施	岩手	裏岩手自然観察会　9月7日～ 8日実施、参加者は5名、植生、虫、動物に関しての観察を行なった。
	茨城	10月14日～ 15日 南会津の山で、きのこ観察会と台倉高山登山を実施した。11月4日 奥久慈「憩いの森」で、森林インストラクター（支部会員）によるガイドで植物観察会を実施した。
	東京多摩	地域の登山愛好者向けに地域山域内の自然観察会を行なった（年2回実施、一般参加者40名、季節毎に御岳山レンゲショウマ観察会、高尾山シモバシラ観察会を実施、支部会員はボランティアで指導者・補助員として参加)。
	石川	自然観察会を県内の歴史あるハイキングコースで実施（会員の自然観察委員により、コースの歴史的背景や、植物の植生、生息する動物、眺望できる山並み等を解説。10月に実施、一般参加者6名)。
	福岡	自然観察登山「九州の熊?を訪ねて」平成24年3月16日～ 17日、場所:古祖母山、障子岳、参加者22名(一般参加者数:12名)九州の熊の痕跡を訪ねる勉強会、解説登山を行なった。
	熊本	阿蘇外輪山の山野草(サクラソウ・肥後イカリソウ他)を観察登山、 5月13日　阿蘇北外輪山～押戸石　参加者26名(一般募集・会員及び一般登山者の交流)。

Ⅰ-9 登山教室の実施	越後	新潟県山岳協会の岩登り講習会（6月）や冬山講習会(2月)に指導者・講師を派遣し協力した。
	石川	ロープワーク・登攀ギア操作講習会を開催(6月に実施　一般参加者15名)。
	東海	中日文化センター・NHK文化センター・朝日カルチャーセンターの3教室で年4期に分け通年開講し、いずれも座学と現地山行。
	関西	初心者・中級者・上級者各クラス毎に、共通の3回の座学と、クラス毎に9回の実技講習を行なった。「安全な登山の普及」を目的に、山登りの初心者から雪山や岩登り等の本格的な登山を目指す方々を一般公募して実施した。
	広島	講師派遣（中国新聞文化センター登山講座講師)、毎月1回広島、呉、福山の3地区4教室での、「里山ハイキング」、「初級登山講座」及び「中級 登山講座」のほか「ユース登山講座」や「ジュニア自然学校」などそれぞれの年齢構成に応じた登山講座の11クラスに、支部会員から講師を派遣。延べ約1,500名の市民が受講した。
	四国	「初心者向け登山教室」　登山用品店に登山教室のチラシを置いて受講生を募集、今年度は昨年度に引き続き安全登山を行うために座学や技術を講習し、受講生のレベルアップを目標とした。平成24年8月～平成25年3月までの毎月第4日曜日に実施。(2月のみ第2日曜日)受講生述べ144名。
	北九州	「登山事故防止講習会」通常会員、一般の人を対象として、皿倉山にて、年3回　岩場でのザイルを使用した救助方法の研修を行なった。参加者合計33人
	熊本	第9回登山教室　阿蘇南外輪山「地蔵峠～駒帰峠」参加者46名。第8回登山研修会in杵島岳・往生岳2月3日　参加者36名。 勤労青少年ホーム健康づくり支援講座「始めよう山歩き」 10月23日、30日（講座）　会場　勤労青少年ホーム、 11月11日(実技)俵山、参加者数　28名。
	東九州	初心者を対象とした登山入門教室「トレッキング入門講座」を9月から12月にかけて実施した。一般からの受講者36名。「安全で楽しい山登り」を基本に、座学として8つのカリキュラムを組み、1回2時間の講座を4回実施、その後実践講座としてキャンプや小屋泊まりの体験登山を二回実施した。

事業名	支部名 委員会名	事業内容
Ⅰ-11 冬山登山指導	山陰	「大山冬山パトロールの実施」3月9日、10日及び20日の3日間、鳥取県警八橋警察署署員2人、山陰支部会員3人の計5人の単位で3日間冬山の安全指導を実施した。
Ⅰ-12 身体障害者支援登山	茨城	「茨城県 自閉症協会 協力登山」自閉症者の登山に支部会員が同行し支援した。5月、7月、8月の3回実施、各回、自閉症者と家族 20 ～ 30名、茨城支部会員 5 ～ 8名が参加した。8月の場合は日光白根山で行ない、自閉症協会30名、支部会員8名、特別参加として鹿児島県自閉症協会から小学5年男子と父親が参加。全員が登頂することが出来た。児童の母親からの手紙では、「平成16年からの富士登山にはじまり、日光社山、磐梯山、上高地山研に宿泊しての岳沢登山と家族だけでは困難なことを皆で支えあい交流したことは、自分たちを見直し、生活を変える良い機会となった」とあった。
	埼玉	「障害者とのふれあい登山」平成24年4月4日に埼玉県障害スポーツ協会と共同主催で障害者11名と鐘憧堂にてふれあい登山を実施した。
	東海	「視覚障害者支援登山」（視覚障害者13名を対象とし5月13日実施、秋季は雨天中止。） 「スペシャルオリンピックス愛知との登山」（知的発達障害児10名を対象とし4月14日・15日鈴鹿ハライドにて開催。）
	熊本	初めての企画として知的障害者を対象に親子登山を実施、第1回SOアスリート登山教室、 8月19日（日）「阿蘇鞍岳」、「ツームシ山」参加者　44名。
Ⅰ―14 海外交流事業	海外委員会	「富士山　国際交流登山」本年2回開催(5月・9月)、海外からの参加者各回10名程度、国際交流を目的とした富士山登山の実施。
Ⅰ-15 幼稚園児から中学生までの体験登山	北海道	第13回「自然児学校事業」を開催、日程は7月27日～ 29日、参加児童21名。国立日高青少年自然の家・からまつキャンプ場。親と子供たちを対象に森・川・山をフィールドとするアウトドア生活を体験し、自然の美しさと厳しさにも接することにより、自然保護・共生の精神を育むことが目的。
	栃木	「親子登山教室」を夏休みに実施、13名参加。
	東海	「親と子のふれあい登山教室」幼稚園児を対象とした登山体験で10月20日・27日2回開催、園児107名。
	京都滋賀	滋賀県大津市立藤尾小学校の登山等の校外活動に指導・安全管理者を派遣して協力。
	関西	6月1日の「山の日」に、一般の方を対象に子供･孫を連れた「わんぱく登山教室」を開催した。

事業名	支部名 委員会名	事業内容
	岩手	早池峰山ﾊﾟﾄﾛｰﾙ　6月9日、7月7日、8月11日、9月15日、10月13日　5回計13人参加、　早池峰の貴重な高山植物の保護を中心とした山岳環境保全に努めた。
	東海	猿投の森の生物調査。
	京都滋賀	支部自然保護部会を中心に京都の希少植生の調査と保護活動を継続的に行なった。 滋賀県比良山系及び比良山スキー場跡地の植生再生についての活動を継続的に行なった。
	広島	NPO法人西中国山地自然史研究会との合同事業として、戦後牧場として開拓された原野を、本来の湿原に再生し、鷹などの猛禽類や野生植物の再生を試みた。広島支部は、6月に帰化植物の除去を行ない、29名が参加した、今後も引き続き重点計画として推進していく予定。高岳山頂付近の景観回復及び環境整備として、山頂周辺の樹木を伐採、除草した(12月 20名)。
	北九州	森林保全巡視を実施した。巡視員32人がそれぞれの山域に入り、ゴミ不法投棄の監視を始めとする活動を行なった。
Ⅲ-2 山岳環境保全活動	熊本	第1回森林保全巡視（清掃）登山　4月22日阿蘇外輪山「鞍岳」、「ツームシ山」、参加者9名、雨天のため参加者は少なかったが、登山路の崩壊もなく、ゴミ等もなかった。第2回森林保全巡視（清掃）登山　五家荘の大金峰からと小金峰からの交差登山を実施。参加者15名。
	科学委員会	探索山行　6月23 ～ 24日に実施、磐梯山の火山地形観察が目的、一般参加者25名。
他1-1	YOUTH CLUB	青年部を対象に岳沢において雪上訓練（5月2回）。青年部、学生部を対象に小川山において夏山訓練(6月1泊2日)。
		青年部を対象に穂高合宿(7月1回、8月3回)。青年部を対象に小川山において訓練（6月、9月各1泊2日、10月3泊4日)。
		青年部を対象に日和田山にて講習（12月1回)。学生部を対象に富士山雪上訓練合宿(1泊2日)。
		青年部、学生部を対象に栂池雪崩講習会（1月2泊3日)。学生部を対象にアイスクライミング講習会(2月1泊2日)。
	集会委員会	会員のため登山を実施(国内は5月、6月、9月、10月、12月、1月に実施、海外は10月、1月に実施)。
他1-2	図書委員会	図書交換会の開催　(12月1日　年次晩餐会会場にて)。

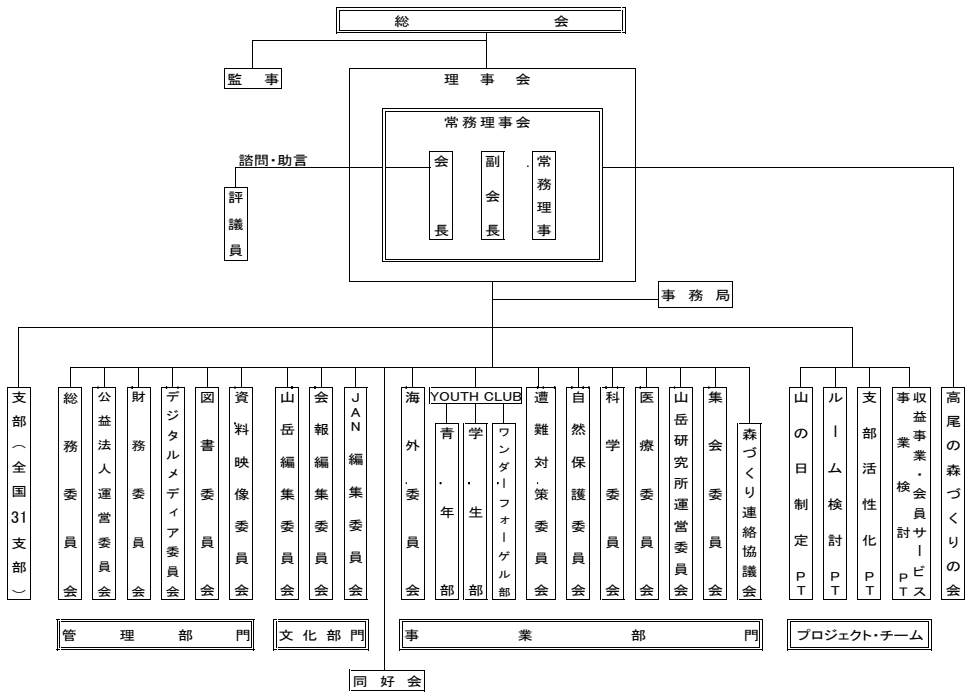
事業名	支部名 委員会名	事業内容
Ⅱ-2 山岳図書館の運営事業	図書委員会	講演会 「山岳図書を語る夕べ」を10月26日実施。講師に山岳書の装丁家である小泉弘氏を迎えて、山岳書をとりまく状況を拝聴した。小泉氏は秩父宮記念山岳賞を受賞。
Ⅲ-1 森づくり活動	北海道	支笏湖復興の森づくり
	青森	平成11年以来実施している「白神山地ブナ林再生事業」を津軽森林管理署と協力して実施（6月、9月に一般の協力を得て実施)。本年は12名参加。
	福島	「植生復元作業支援」吾妻連峰・酸ヶ平などの植生復元に努めている吾妻山自然倶楽部を支援し、ヒメスギの種の採取、種蒔き等の作業に参加、年1回、6月に実施した。
	福井	夜叉ヶ池近傍にて森づくり実施(5月11日、6月11日)。
	岐阜	岐阜県林政部治山課との協働による「権現の森林づくり」を実施、(年16回実施、一般参加者約100名を予定したが、林道崩壊の為、期首の2回は藤波口から上って作業した。9月12日から予定通り作業実施。作業回数は10回、延参加者65名)。
	東海	「猿投の森づくり活動」（森づくりと市民の森林体験のための整備、森の幼稚園11月4日、森の音楽祭10月27日の実施。)
	関西	「本山寺山森林づくり」に関して5月18日近畿中国森林管理局長と「社会貢献の森における森林整備等の活動に関する協定書」を締結した。高槻市の「社会貢献の森」にて、関西支部の会員及び一般公募の会員により、毎月1回森林整備、自然環境の保全を行なった。
	宮崎	「水源の森づくり」田野の森（宮崎市)、ロキシーヒル（西都市)、野尻の森（小林市）総面積1.1ヘクタールに広葉樹　1.600本を植樹して、毎年3回の下草払い、枝打ち、補植等の作業を行ない、森林の育林・保護活動を実施。そのほか「水源の森づくりをすすめる市民の会」の団体会員としても活動している。

事業名	支部名 委員会名	事業内容
Ⅲ-2 山岳環境保全活動	北海道	「高山植物盗掘防止事業」を実施、実施期間6月1日～ 10月10日、大雪山系にて監視活動154回、実人数30名。研修会5月25日　講師1名、　参加者22名、北海道の補助事業である「高山植物盗掘防止事業」を受託。指導員・監視員の派遣協力。

添付資料

平成25年4月1日現在

公益社団法人 日本山岳会組織図



18

科　　目	当年度	前年度	増減
預り金	9,247,071	10,612,227	△ 1,365,156
流動負債合計	9,335,071	10,716,227	△ 1,381,156
2　固定負債			
退職給付引当金	4,219,900	3,954,500	265,400
固定負債合計	4,219,900	3,954,500	265,400
負債合計	13,554,971	14,670,727	△ 1,115,756
Ⅲ　正味財産の部			
1　指定正味財産			
寄付金	33,200,000	33,200,000	0
指定正味財産合計	33,200,000	33,200,000	0
（うち基本財産への充当額）	(8,000,000)	(8,000,000)	(　　0)
（うち特定資産への充当額）	(25,200,000)	(25,200,000)	(　　0)
2　一般正味財産	286,755,208	281,630,662	5,124,546
（うち基本財産への充当額）	(　　0)	(　　0)	(　　0)
（うち特定資産への充当額）	(80,267,854)	(76,454,000)	(3,813,854)
正味財産合計	319,955,208	314,830,662	5,124,546
負債及び正味財産合計	333,510,179	329,501,389	4,008,790

正味財産増減計算書

平成24年4月1日から平成25年3月31日まで　　（単位：円）

科　　目	当年度	前年度	増減
Ⅰ　一般正味財産増減の部			
1.　経常増減の部			
(1)　経常収益			
基本財産運用益			
基本財産受取利息	4,565	4,371	194
特定資産運用益			
特定資産受取利息	27,461	41,091	△ 13,630
受取入会金			
受取入会金	4,512,000	3,380,000	1,132,000
受取会費			
通常会費	55,083,000	56,885,210	△ 1,802,210
終身会費	83,400	72,400	11,000
事業収益			
広告料収益	1,687,880	1,569,370	118,510
刊行物売上	138,100	86,600	51,500
山研使用料収益	2,409,274	1,279,293	1,129,981
その他事業収益	7,673,530	7,682,300	△ 8,770
受取補助金等			
受取地方公共団体補助金	300,000	95,744	204,256
受取地方公共団体助成金	507,000	507,000	0
受取民間助成金	5,419,000	413,000	5,006,000
受取助成金	0	6,813,117	△ 6,813,117
受取寄付金			
受取寄付金	3,054,568	812,481	2,242,087
受取寄付金(震災)	0	4,741,162	△ 4,741,162
会員寄付金	13,245,119	1,812,263	11,432,856
雑収益			
受取利息	8,212	3,137	5,075
雑収益	5,401,126	1,368,906	4,032,220
経常収益計	99,554,235	87,567,445	11,986,790
(2) 経常費用			
事業費			
出版事業費	14,312,862	13,903,674	409,188
図書管理事業費	5,584,435	6,963,167	△ 1,378,732
調査研究事業費	1,051,795	1,065,916	△ 14,121
指導研究事業費	64,905	213,709	△ 148,804
山岳環境保全事業費	978,196	0	978,196
支部事業費	18,556,799	12,207,036	6,349,763
高尾の森づくり事業費	6,154,388	4,762,788	1,391,600
ユースクラブ事業費	5,597,072	0	5,597,072
海外事業費	22,000	102,110	△ 80,110
海外登山助成金	902,450	550,800	351,650
山岳研究所事業費	4,181,180	4,757,342	△ 576,162
山岳研究所減価償却費	3,813,854	3,813,854	0
ミニ水力発電事業費	36,750	30,000	6,750
機械装置減価償却費	171,753	171,753	0

事業名	支部名 委員会名	事業内容
他1-3	総務委員会	年次晩餐会の開催（12月1日　品川プリンスホテル430名）。
	千葉支部	「全国支部懇談会」の開催（10月20日～21日　国民宿舎サンライズ九十九里　190名）。
他1-6	会報編集委員会	会報「山」の№803～№814を発行した。

第2号議案 平成24年度決算報告

要　旨

入会金収入は前年度比1,132千円増加したが、一方で会費収入は55,166千円で1,791千円減となり、両者合わせて659千円の微減となった。

公益社団法人となってこの１年を顧みると、寄付金や補助金などの収入は22,525千円に達している。その中には過去からの継続的支援分もあるものの、全体として大幅な増加となったことが特筆される。広島支部ルーム取得にかかる寄付金10,371千円（決算書ベース）が大きなものであるが、他にも支部周年行事、特定の支部事業（海外登山、分水嶺踏破、登山教室など）にたいして寄付金が寄せられた。この傾向は今後における本会の飛躍、支部活性化に大きく繋がっていくものと考えられる。

支出総額は94,429千円と前年度比7,786千円の増加となった。これは特別予算5,000千円を組み込んだYOUTH CLUB事業費の支出や、支部における新入会員増加に伴う運営交付金、事業補助金の増加、首都圏３支部へ運営交付金、事業補助金を他支部並みに交付したことなどがその主因である。

なお、当期においてここ数年実行を見送った余剰金による長期計画準備金の積み増し3,813千円（山岳研究所減価償却費相当額）を行うことができた。上高地山岳研究所の経年による老朽化も進んでおり、早晩抜本的な対策を講じる必要があること、経費節減、新会員増加などの施策が功を奏し、ここ数年、以前に比べて財務状況が比較的好転してきた結果によるものである。

以上、当期も引き続き経費節減に努めた結果、正味財産増減額は広島支部ルーム取得による収支効果も大きく寄与し、最終収支はこれらを総合して5,124千円の増加となった。

貸　借　対　照　表

平成25年3月31日　　現在（単位：円）

科　　目	当年度	前年度	増減
Ⅰ　資産の部			
1　流動資産			
現金預金	41,366,700	45,160,559	△ 3,793,859
未収会費	6,240,000	6,288,000	△ 48,000
未収金	0	62,500	△ 62,500
貯蔵品	1,829,302	2,085,954	△ 256,652
仮払金	1,126,805	0	1,126,805
流動資産合計	50,562,807	53,597,013	△ 3,034,206
2　固定資産			
(1) 基本財産			
貸付信託	300,000	5,790,000	△ 5,490,000
定期預金	7,700,000	2,210,000	5,490,000
基本財産合計	8,000,000	8,000,000	0
(2) 特定資産			
秩父宮記念基金	15,200,000	15,200,000	0
海外登山基金	42,500,000	42,500,000	0
遭難防止事業基金	10,000,000	10,000,000	0
長期計画準備金	37,767,854	33,954,000	3,813,854
退職給付引当資産	4,219,900	3,954,500	265,400
特定資産合計	109,687,754	105,608,500	4,079,254
(3) その他固定資産			
土地	90,546,119	86,737,705	3,808,414
建物	72,140,869	73,874,026	△ 1,733,157
建物附属設備	1,060,238	0	1,060,238
什器備品	1	1	0
機械装置	1,512,391	1,684,144	△ 171,753
その他固定資産合計	165,259,618	162,295,876	2,963,742
固定資産合計	282,947,372	275,904,376	7,042,996
資産合計	333,510,179	329,501,389	4,008,790
Ⅱ　負債の部			
1　流動負債			
前受金	88,000	104,000	△ 16,000

監査報告書

平成25年5月13日

公益社団法人　日本山岳会
　会長　尾上昇　殿

監事　浜崎一成
監事　平井拓雄

私共は、公益社団法人日本山岳会の平成24年度（平成24年4月1日から平成25年3月31日まで）の監査を行いました。
その結果を次のとおり報告します。

1. 会計に関する監査
会計に関する監査のため、期中の取引に関する帳簿、証憑書類を閲覧し、期末資産の残高について実査を行いました。
監査の結果、添付の平成24年度の財務諸表（貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録）及びその付属明細書は、いずれも法令及び定款に従い公益社団法人日本山岳会の財産及び損益の状況を、すべての重要な点において適正に表示しているものと認めます。

2. 業務に関する監査
会計以外の業務の監査のため、理事会に出席し、必要に応じて理事等に面談して質問することなどを行いました。
監査の結果、事業報告及びその付属明細書は、法令及び定款に従い公益社団法人日本山岳会の状況を正しく示しているものと認めます。
また、理事の職務の遂行に関し、法令若しくは定款に違反する重要な事実は認められません。

以　上

第3号議案 平成25・26年度役員（理事・監事）

（50音順）

役職	氏　名	会員番号	年齢	備考
理事	大槻　利行	No.１３０１９	50	新任
理事	落合　正治	No.１３５１７	64	新任
理事	勝山　康雄	No.８７７２	61	新任
理事	川瀬　恵一	No.１４４２４	53	再任
理事	黒川　　惠	No.７５４７	63	新任
理事	佐藤　　守	No.１３４３１	65	新任
理事	節田　重節	No.６７２０	70	再任
理事	高原　三平	No.７９４９	65	再任
理事	直江　俊弐	No.１４７７５	36	新任
理事	野口いづみ	No.１２１０５	64	新任
理事	古野　　淳	No.１２１９４	52	再任
理事	森　　武昭	No.９６２０	68	再任
理事	山賀　純一	No.１４６６０	45	新任
理事	山田　和人	No.９９０９	53	新任
理事	吉川　正幸	No.７３４５	64	新任
監事	浜崎　一成	No.１１２４８	81	再任
監事	吉永　英明	No.７０４５	71	新任

（年齢は平成25年6月15日現在）

報告事項 平成25年度事業計画及び収支予算

事業計画　（要約）

1. 公益目的事業

本会は、公益目的事業として⑴登山振興事業、⑵山岳研究調査事業、⑶山岳環境保全事業の実施を目的としている。概ね24年度と同様の事業を行うことを基本としているが、平成25年度において特に留意した事項は下記のとおりである。

⑴登山振興事業

秩父宮記念山岳賞表彰事業、海外登山隊への助成事業、機関誌「山岳」（第百八年）ほかの図書の刊行は従来どおりであるが、特に2年目となる若年会員の入会促進対策として展開しているユースクラブ事業（登山講習会の開催、冬山天気予報の配信及び日・

科　　目	当年度	前年度	増減
その他事業費	9,295,282	9,623,330	△ 328,048
支出寄付金(震災)	0	4,741,162	△ 4,741,162
事業管理費	19,930,462	20,294,245	△ 363,783
事業費計	90,654,183	83,200,886	7,453,297
管理費			
給料手当	2,677,838	2,318,160	359,678
臨時雇賃金	20,454	20,638	△ 184
退職給付費用	24,947	29,926	△ 4,979
福利厚生費	155,573	147,812	7,761
旅費交通費	164,634	159,231	5,403
通信運搬費	98,116	152,751	△ 54,635
会議費	18,264	45,649	△ 27,385
消耗品費	20,516	17,841	2,675
修繕費	8,711	0	8,711
印刷製本費	67,977	90,193	△ 22,216
光熱水量費	32,075	29,697	2,378
電話料	18,636	21,966	△ 3,330
保険料	7,860	13,507	△ 5,647
租税公課	39,708	38,556	1,152
負担金	2,400	2,400	0
支払手数料	87,220	119,666	△ 32,446
建物減価償却費	68,613	5,966	62,647
事務所管理費	112,616	98,401	14,215
その他管理費	55,715	28,113	27,602
雑費	93,633	102,296	△ 8,663
管理費計	3,775,506	3,442,769	332,737
経常費用計	94,429,689	86,643,655	7,786,034
評価損益等調整前当期経常増減額	5,124,546	923,790	4,200,756
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	5,124,546	923,790	4,200,756
2. 経常外増減の部			
⑴ 経常外収益			
経常外収益計	0	0	0
⑵ 経常外費用			
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
指定正味財産額への振替額	0	△ 33,200,000	33,200,000
当期一般正味財産増減額	5,124,546	△ 32,276,210	37,400,756
一般正味財産期首残高	281,630,662	313,906,872	△ 32,276,210
一般正味財産期末残高	286,755,208	281,630,662	5,124,546
Ⅱ　指定正味財産増減の部			
基本財産	0	8,000,000	△ 8,000,000
秩父宮記念基金	0	15,200,000	△ 15,200,000
遭難防止事業基金	0	10,000,000	△ 10,000,000
当期指定正味財産増減額	0	33,200,000	△ 33,200,000
指定正味財産期首残高	33,200,000	0	33,200,000
指定正味財産期末残高	33,200,000	33,200,000	0
Ⅲ　正味財産期末残高	319,955,208	314,830,662	5,124,546

＊「計算書類の注記」，「付局明細表」及び「財産目録」については，記載を省略した。日本山岳会のホームページを参照して下さい。

1. 経常収益

会費収入57,000千円、入会金収入3,300千円のほか、森づくり事業に対する補助金・助成金を主とする受取寄付金等として12,000 千円程度を計上し、年次晩餐会収益を含む総額を88,800千円とした。これは概ね平成24年度と同様の水準である。

2. 経常費用

⑴事業費

機関誌「山岳」、会員向けの会報「山」などの出版事業費に13,500千円、支部事業費に18,240千円、森づくり事業費に5,000 千円を計上したほか、若手会員増強のため平成24年度に設定したユースクラブ強化の特別予算5,000千円を計上、減価償却費を含む事業費を総額71,560千円とした。

⑵事業管理費及び管理費

公益目的事業費を一定割合確保することが求められているため、従来の管理費を事業にかかる管理費と法人全般にかかる管理費に区分して表示した。管理関係費全体として総額24,200千円とした。これには給料手当9,500千円（他に事業費中に4,800千円含まれている）、旅費交通費2,200千円、事務所管理費1,640千円等が含まれている。

中・韓学生交流登山の実施等）に力を入れ、予算措置をしたところである。

幸いにして会員の老齢化がユースクラブの活動によって緩和の傾向となっている状況が伺える。

また、「山の日」制定プロジェクトについても他の山岳団体と協力して平成24年度同様の推進体制をとることとする。

⑵山岳研究調査事業

山岳研究の基地としての「上高地山岳研究所」の積極的活用に加え、東京の事務所内に開設している「山岳図書館」について、その運営を担っている図書管理委員会と山岳図書の研究を担当する「図書委員会」を統合し、山岳図書館のより効率的な運営の下、会員外の方々を含む利用者の拡大を通じて山岳図書研究の推進をする。

⑶山岳環境保全事業

東京多摩における「高尾の森づくり事業」、東海地区の「猿投の森づくり事業」をはじめとする全国11支部で実施されている森づくり事業を推進し、より全国的な規模での展開を目指していく。

また、全国自然保護集会等のシンポジウムの開催を通じて広く山岳環境の保全の必要性を訴え、登山愛好者としてのフィールドとしての山岳地域における環境の維持・保全を期す。

2. 共益事業

会員を対象とした会員のための事業としては、概ね下記のごとき事業を実施する。

⑴年次晩餐会の開催（12月）
⑵会報「山」の発行（No.815～ No.826）
⑶上高地山岳研究所の利用
⑷山岳傷害保険の斡旋
⑸会員向け登山指導
⑹本会ロゴ入り登山用具等の頒布

3. 収益事業

本会が選択した「日本300名山」の最新情報を盛り込んだ「日本山岳会版」の新版ガイドブック（全3巻）の刊行を目指し、平成25 年度より全国31支部による分担取材、執筆に着手する。なお、新版ガイドブックは、平成26年5月頃の刊行を予定する。

4. 法人管理

⑴組織

平成24年度1月には、全国31番目の支部としての「四国支部」が設立され、平成25年度には「群馬支部」の設立が予定されており、全国の支部化推進の観点から、支部活性化プロジェクトチームによる支部運営等の応援体制を確立する。また、委員会についても、平成24年10月に発足した「公益法人運営委員会」の充実を図り、今般の法人改革関連法が求める法人としてのコンプライアンスの徹底とガバナンスの確立の一環として各種規程類の整備及び支部会計の適正化等を図る。

ユースクラブについては、従来の青年部、学生部指導及び指導の各委員会を傘下にしていた体制を、より実態に合った体制とするため、青年部、学生部及びワンダーフォーゲル部の3 部制とし、合わせて従来の指導委員会を遭難対策委員会として遭難防止活動に力を入れることとした。

図書管理委員会と図書委員会の統合については前記のとおりである。

⑵会員動向

平成25年3月13日現在会員数5,121名、平均年齢はユースクラブの活発な活動による入会者増等により約67歳と安定して推移しているが、少子高齢化著しい我が国の実情から、今後における会員の減少傾向、高齢化が避けられないものと認識し、今まで以上の会員増対策を講ずべく、あらゆる活動を通じて入会勧誘に務め、資料等の充実に留意する。

予 算

本会における財務収支は、事業経費の需要増を反映して、年々逼迫感を増しつつある。会員からの会費収入が基本収入で経常収益全体の約64％を占める現状から、今後とも、会費増に努めるとともに、支出を抑え、基礎的収支（プライマリーバランス）に留意した財務運営を心がける。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集会委員会――

「奥秩父岩峰を歩く」に参加して

「奥秩父岩峰を歩く」の山行案内を見た。五郎山は未踏だし、林岳は初めて聞く山名でもあり興味がわき、参加することにした。6月8日、緑が目にしみる高原列車で信濃川上駅へ集合、総勢13名の仲間が集まった。

初日は、まず今回の宿である町田市自然休暇村へ立ち寄った。宿は、今回の山行の基地として最高の条件を備えていた。周囲は山々に囲まれ、千曲川の支流がそばを流れ、ゆっくり昼寝でもしたくなるような施設であった。荷物を預け、近くの幻の滝と林岳へと足慣らしに出かけた。ハルゼミがうるさいほどに鳴くカラマツ林を歩き、ひと登りで山頂に着いた。川上村の山並みの山腹に首を持ち上げたような岩峰で、アカマツ越しに周囲の山々が見上げられた。小粒でちょっぴりスリルも味わえる手軽な山であった。下山後は、宿周辺の林床でベニバナイチヤクソウの群生が鑑賞できた。

2日目はお目当ての五郎山だ。緩やかな林道から山路に入ると、急な斜面に変わり新緑のカラマツ林の中を、ほぼ一直線に急登が続いた。ミズナラやシラカバの林になると、岩混じりの路に変わったが、なおも急登は続く。マキヨセの頭へ出て岩稜をいくつか越えると、眼前にドーム状の岩峰が立ちはだかり、なおも延々と岩稜が続いていた。岩や木につかまり、足元を確かめ、よじ登ったり下ったりと緊張の連続であった。山頂で昼食、奥秩父の名峰を山座同定し、登頂の喜びを皆で分かち合った。下山はさらに慎重に岩稜を通過、急斜面の樹々の緑に感動しながら下った。夕食後、2日目の団欒は適度に盛り上がった。山岳会で活躍している方ばかりで、得ることの多いひとときを過ごした。

男山山頂にて

3日目は、天狗山と男山。レタス畑から見ると、異様な岩峰が天を衝いている。今日も手強そうだ。宿の車で馬越峠へ。そこからほぼ尾根伝いに歩いた。ミズナラやツツジ、リョウブなどが混じる岩稜を歩き、岩峰をよじ登ると天狗の鼻の先のような山頂に着いた。目指す男山はまだ遠い。天狗山の山稜を下ると、いくらか歩きやすい路も混ざるようになり、ひと息つきながら岩稜も越える。振り返ると天狗山がそびえ立っている。長い尾根を歩き、最後の岩稜を登ると男山の山頂に着いた。広大な佐久平に浮かぶ山々を眺め、昼食。最後の岩峰に別れを告げた。急斜面を一気に下り御所平へ向かう。クリンソウ、フタリシズカ、レンゲツツジなど林床の花々を愛でながら車道に出て、無事3日間の山行を終えた。

天気・山・宿・仲間に恵まれたこの上ない楽しい山行でした。またの企画を楽しみにしています。集会委員幹事・同行の皆様ありがとうございました。

（金谷修文）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

越後支部

平成25年度越後支部総会と親睦登山

5月25日、越後支部総会が東蒲原郡阿賀町広谷の「みかぐら荘」にて開催された。この場所は御神楽岳山麓で常浪川を見下ろす景勝地で、山の新緑が最盛期の時期であった。支部総会出席者40名と委任状137名で、総会議決数177人（支部会員82パーセント）である。

14時から山崎幸和支部長の挨拶で始まり、「毎年越後の山並みの見える場所で総会を開催し、懐かしい方々ともお会いできる機会となっている」と、会場設定に当たられた本間一人委員と事務局に感謝したい、と述べた。また、公益法人移行から1年間が経過し、事務局および各役員には大変なご苦労があった、とねぎらった。

引き続き、山崎支部長の議事進行で議題審議に入り、平成24年度の活動・会計報告、平成25年度の活動方針と予算説明、支部規約の一部追加改訂があり、すべて異議なく承認された。特に今回は支部役員改選の年に当たり、役員候補者案が提示され、互選の結果、新支部長に橋本正巳氏が選出された。その他の役員として、副支部長に本間宏之氏（再任）と遠藤家之進正和氏（新任）、事務局長に桐生恒治（再任）、事業委員長に小山一夫氏（新任）、広報委員長に本間一人氏（新任）、図書委員長に五十嵐力氏（新任）、自然保護委員長に七澤恭四郎氏（新任）、県山協委員長に目崎貞良氏（再任）、総務委員長に桐生恒治（再任）という顔ぶれに、今後の支部運営を託すことになり、拍手をもって承認された。

また、今年度の新企画として全国31支部が参加協力する事業で、『新版日本三百名山登山ガイド』のリニューアルを行なうプロジェクトが発足した主旨説明があった。越後支部は20山を担当することになり、遠藤俊一氏が支部プロジェクト統括リーダーで、各山域の執筆担当者を紹介した。

支部総会、会場のみかぐら荘にて集合写真

総会終了後、16時から記念講演となり、地元の津川町在住で新潟県写真家協会理事の山口冬人氏（非会員）から、「奥阿賀の四季」と題した写真紹介とお話をしていただいた。山口氏がフィールドとする奥阿賀の山々、阿賀野川、津川の街並みなど、四季を通じた精力的な風景写真に感銘させられ、興味津々に聞き見入った。

その後、席を移して懇親会となり、橋本新支部長の乾杯の音頭で開宴。越後岳人の交流サロンとして旧交を温め、地酒を飲みながらの山談義に花を咲かせた。

26日は晴天に恵まれ、絶好の登山日和であった。予定どおり8時にマイクロバスで宿舎を出発、登山参加者は30名であった。登山口の土井集落で、本間（一）リーダーより説明を受けた後、8時40分出発。まぶしい新緑のなかを小鳥の鳴き声を聞きながら沢沿いに登り、およそ1時間で九才坂峠に達する。この峠は越後と会津の国境であり、弘法大師が9歳のときに越えたと

いう言い伝えのある、由緒ある名前の峠だ。峠の大きなブナの木に懐かしい看板を見つけ、当時の関係者を感激させるものがあった。その看板には、昭和41年に越後支部が結成20周年を記念して実施した、「新潟県境全縦走踏査登山・日本山岳会越後支部」の文字があった。錆びかけてはいるものの、半世紀に近い年月を厳しい風雪に耐えてきたものだ。今でも、明確にその文字を読み取ることができる、越後支部としての活動を誇示できる勲章である。

休憩後、稜線沿いに目指岳（650・3㍍）に向かう。頂上直下は結構な急登であったが、10時20分到着。目指岳山頂には、三等三角点が設置されている。山頂から見る、春霞の中に残雪で真っ白な飯豊連峰が、実に鮮やかであった。その後、九才坂峠まで引き返し、11時10分、九才坂峠より会津側の安座集落までのんびりと下山開始。12時に安座集落で迎えのマイクロバスに乗り込み、12時40分、「みかぐら荘」に到着。13時、解散となった。

（桐生恒治）

図書紹介

クライブ・ホランド・著／太田昌秀・訳
『北極探検と開発の歴史』

2013年3月
同時代社刊
単行本 213㌻
定価 6001円

本書はダイジェスト版213㌻、完全版CD、地図冊子の3部より成る。翻訳者によれば、原著はA4判、704㌻もの英文の大作で、日本の読者の便宜を考えて10分の1のダイジェスト版を200㌻の本仕様にし、全訳文はCDに収めて扱いやすくした、ということである。日本人は西洋人と比べると北極圏への関心が低く、知識も少ない。南極観測船宗谷を熱狂して南極へ送り出した記憶が強いためであろうとも述べられているが、まったくそのとおりである。また昭和基地からはいろいろなニュースが送られてくるが、北極のニュースはあまり聞かれない。

かつて村山雅美氏が南極の話をされたとき、開口一番、南極と北極について、ユーモラスに大略こう話された、「あるとき、神様が拳骨で北極点にどんと衝撃を与えたら、北極は海の中へへこみ、そのへこみ分だけ南極が持ち上がって南極大陸ができたと言う人もいる」と。

北極について書かれたもので最も感動的な書物はナンセンの「フラム号」であろうと、筆者は思う。この邦訳書『フラム号、北極海横断記――北の果て』（ニュートンプレス社）もまた太田昌秀博士によって翻訳されたものであり、A4判418㌻の浩瀚（こうかん）な書物なのである。ただただ博士の強烈なエネルギーに驚嘆させられる。

標題の書物にはベーリングの探検、フランクリン隊の遭難、ノルデンショルの北東航路完航、フラム号、アムンセン北西航路完航、ピアリー隊北極点到達などは勿論のこと、紀元前500年から1915年までの北極探検と開発の歴史が、編年体で詳細を極めて書きつくされている。原著副題にエンサイクロペディアとあり、北極の百科事典の役割も果たしている。

なおダイジェスト版は渡辺興亜氏の手によるものであり、巻末に付された「日本人による北極探検、調査、観測年表」は兒（こ）玉裕二氏が中心となり作成されたものである。

地球には今後発掘される可能性のある石油は10～15㌫、ガスは20

ページ以上があるとも言われている。太田博士も北極圏の大陸棚には地球上の未確認燃料資源の40ページがあると推定され、そんな時にこの海域の開発の歴史を知ることはとても大切だと思われる、と指摘されている。

著者クライブ・ホランド（1946～2000）はケンブリッジ大学スコット極地研究所に勤務された。訳者、太田昌秀（おおた・よしひで、1933～）は、ノルウェー極地研究所に勤務され、現在同所嘱託研究員、オスロ在住。

（田村俊介）

信州大学山岳科学総合研究所・著
『山岳科学ブックレット1～10』

2009年~2013年　オフィスエム刊
A5判 54ページ~148ページ
定価 980円

松本、長野、伊那など信州大学のある所は、いずれも日本有数の山岳地帯だ。山国・信州の特徴ある研究として「山岳科学」を打ち立てようとした歴史を経て、山岳科学総合研究所が研究機関として確立されたものだという。あらゆる方向から山を科学研究のテーマとして10年余、研究の成果や、シンポジウムの概要、新聞連載などを編集したこの叢書の刊行が始まって4年目で、第10号が発行された。

各号のテーマは多岐にわたっている。たとえば1号は「白馬大雪渓の度々の崩落事故について」、白馬村、砂防事業・登山と観光など、それぞれの立場から問題点の洗い出しと事故対策が模索されている。また地球温暖化（2号）、山と信仰、山村の暮らし（6号）、蝶（7号）、ツキノワグマ（8号）など、フィールドワーカーたちの熱気が伝わる。

「人は山を目指す」（4号）は、老人医学専門の医師へのインタビューで構成されている。「Q・中高年は山に行きたがるんでしょうか？　A・中高年は憧れを失いかけているんです」「Q・山登りって人生に似ているところがある？　A・人生そのものです」など……。痛快な問答が展開されていく。能勢医師は熟年層に「インターバル速歩」を指導して効果をあげているようだ。平均寿命や高齢者就業率が全国的にも高い長野県のランキングをさらに引き上げるのではないか。

最新号「山岳に生きる建築」では、梅干野氏は北アルプスの山小屋の履歴、構造を調査して、近代登山の発展に沿って変遷を語っている。建築史の分野に、山小屋の調査研究の礎を築くことを目指したという。まさしく山屋の建築家ならではの発想だ。珍しい、また懐かしい山小屋の写真と図面がたくさん掲載されている。多くの山岳建築の作品が残っている故吉阪隆正氏が設計した涸沢ヒュッテは、1951年に設計を進めるにあたって、現場で雪氷被害に関する実験が繰り返され、それらを踏まえた設計に多くの時間をかけて、石積みに身をうずめて地形に擬態し、雪氷被害を最低限に抑えるように建てられたのだ、という興味深い報告がされている。

山岳科学総合研究所が発信するこれらのブックレット・シリーズは、山と人に関わるあらゆる分野について、専門外の者や、地域の人たちが肩肘張らずに読み進める内容と記述になっていて親しみやすい。個人的には、林業と内水面漁業の現状と将来を論考してもらいたいと願っている。最終的には自然環境再生・保全・活用および防災を実践できる「山岳地域の自然環境と人間活動との持続的な融合の方策を提言する」という壮大な目標を掲げている。広く深い研究活動とその成果を見守りたいものである。

（松澤節夫）

会務報告

平成25年度第3回（6月度）理事会議事録

日時　平成25年6月12日㈬19時～20時30分
場所　日本山岳会集会室
【出席者】尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・川瀬・古野各理事、平井監事
【欠席者】浜崎監事
【オブザーバー】柏編集人

【審議事項】

1・当会主催の全国安全登山実技講習会実施に伴う、日本スポーツ振興センター国立登山研修所の名義後援依頼について（森）

9月に剱沢夏山前線基地、26年3月に国立登山研修所で全国規模の講習会を行なうため。（承認）

2・高松観光コンベンション・ビューローからの助成金があり、受入れたい（四国支部）。（小林）

（承認）

3・支部長の交代について（高原）

・千葉支部：新支部長　諏訪吉春（14255）、退任　篠崎仁（7343）
・山形支部：新支部長　粕谷俊矩（9595）、退任　渡辺誠（1190）
・山陰支部：新支部長　中井俊一（9772）、退任　白根一（8228）
・越後支部：新支部長　橋本正巳（7758）、退任　山崎幸和（5403）

（承認）

4・国土地理院の登山道調査依頼などに対応するため、ワーキンググループ（国土地理院対応WGリーダー：宮崎紘一会員）を新設する。また、5月に発足した「子どもゆめ基金プロジェクト」の名称を変更し、「家族登山普及ワーキンググループ」とする。（高原）

（承認）

5・入会希望者について

28名の入会希望者があった。

（承認）

【報告事項】

1・平成25年度通常総会返信状況について（高原）

現会員数5177名、6月11日現在、出席予定者および委任が3566名あり、過半数を満たし、定足数に達している。

2・平成25年度支部への運営交付金、事業補助金について（小林）

運営交付金1000円、事業補助金1500円（上限）を支部の会員数に応じて支払う。

3・寄付金、助成金受入れについて（小林）

高尾の森づくりへの寄付金4件35万円があり、2名の永年会員から寄付があった。

また高松観光コンベンション・ビューローから助成金が25万円あった。

四国支部の小島烏水顕彰碑建設への募金は、6月12日時点で392万円になった。

4・「山の日」制定PT報告（西村、萩原）

超党派「山の日」制定議員連盟が発足し、6月11日現在で99名が加盟している。

山岳5団体による「山の日」制定協議会を発展的解消し、全国的な「山の日」制定協会を設立する。また、高尾山で「山の日」アピールの集いがあったほか、広島や栃木、宮城、富山、山梨、名古屋などでイベントの開催が予定されている。

5・平成25年度子どもゆめ基金助成金交付決定について（永田）

ウェブサイト「親子で楽しむ山登り」作成に対し、国立青少年教育振興機構からの交付額886万1千円（上限）が決定した。

6・2013年度自然保護全国集会（7月6日～7日）が予定され、節田理事が出席予定。（高原）

7・国土地理院から「国土電子賞2013」推薦団体および推薦案件募集について依頼があり、「山」およびホームページで募集をする。また本件の担当は、国土地理院対応WG（宮崎紘一リーダー）とする。（森）

8・群馬支部設立の準備会が行なわれ、7月13日、設立総会を予定している。（高原）

9・5月1日に北九州支部が、支

部ルームを開設した。（高原）

10・日本山岳博物館（仮称）構想について（森）

ルーム検討ＰＴは、山本リーダー、神崎日山協会長と森で、東京都幹部と面会をし、構想の打診をした。

11・大ネパール展（在日ネパール大使館主催）が行なわれた。盛会だった。（高原）

12・5月20日に寺前加賀市長が来室し、吉永、西村両副会長、高原理事が、「日本百名山」発刊50周年および「山の日」について会談した。（高原）

13・東京都山岳連盟から公益社団法人の認証を受けた旨の通知があった。（高原）

14・富士山登山について、山梨・静岡県から「弾丸登山」自粛を周知させるよう依頼があった。（高原）

15・日本山岳協会から役員改選の通知があった。（高原）

16・会報「山」6月号について、「ロングトレイル・ウォークのススメ」、羽田評議員の追悼などの紹介があった。（柏）

17・本会のホームページに対してサイバー攻撃があり、ホームページアドレスを変更した。またＹａｈｏｏドメインのスパムメールが多かったため、一時的に遮断してある。（永田）

【今後の予定】

1・支部長会議　6月15日

2・臨時理事会　6月15日総会終了後

3・内閣府へ平成24年度事業、決算報告　6月末まで

4・ＰＴ、ＷＧリーダー会議　6月27日18時30分

5・委員長会議　6月28日18時30分

6・同好会連絡会　7月1日18時30分

7・常務理事会　7月3日19時、理事会　7月10日19時

8・役員新旧懇談会　7月25日18時30分

9・第9回山の博覧会（山梨支部）6月29日10時

10・第1回夏山フェスタ名古屋（「山の日」制定協議会ほか）6月29日㈯～30日㈰

11・欅平ビジターセンター開館式（黒部市、環境省）6月30日㈰（山田富山支部長出席）

12・九州五支部懇談会（主管　福岡支部）9月28日㈯～29日㈰

13・山岳4団体懇談会　7月17日㈬19時

平成25年度6月度　臨時理事会議事録

日時　平成25年6月15日㈯15時50分～16時15分

場所　プラザエフ会議室

【出席者】理事　森武昭、節田重節、黒川惠、古野淳、高原三平、吉川正幸、佐藤守、川瀬恵一、大槻利行、勝山康雄、直江俊弐、野口いづみ、山賀純一、山田和人

監事　浜崎一成、吉永英明

【欠席者】落合理事

【審議事項】

1・会長の選任

互選の結果、会長に森理事を選任した。（承認）

2・副会長、常務理事の選任（会長）

互選の結果、副会長に節田、黒川そして古野各理事、常務理事に高原、吉川および佐藤各理事を選任した。（承認）

（会長所信表明）

以下の審議に先立ち、森新会長より別添のとおり所信表明があった。

3・理事の委員会担務について（会長）

①委員会担当理事

・公益法人運営委員会　直江

・財務委員会　吉川

・総務委員会　高原・佐藤

・デジタルメディア委員会　佐藤

・山岳編集委員会　節田

・会報編集委員会　節田

・英文ジャーナル委員会　節田

・図書委員会　節田

・ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ（学生部、青年部、ＷＶ部）　古野、落合

・集会委員会　勝山

・遭難対策委員会　川瀬

・海外委員会　川瀬

・医療委員会　野口

・科学委員会　野口

・自然保護委員会　山田

・資料映像委員会　勝山

・山岳研究所運営委員会　大槻

（承認）

4・理事のＰＴ、ＷＧ担務等およびリーダーの選任（会長）

◎＝担当理事　○＝リーダー

・110周年記念事業実行委員会

◎黒川　○尾上

・会員増強・財政基盤検討ＰＴ

◎黒川

・山の日制定ＰＴ
◎山賀　○萩原
・会員サービスＰＴ
◎節田　○節田
・支部活性化ＰＴ　◎森　○宮崎
・家族登山普及ＷＧ　◎吉川　○永田
・ルーム検討ＷＧ　◎高原　○山本
・国土地理院対応ＷＧ　◎佐藤　○宮崎
・マッキンリーＷＧ◎吉川　○大蔵
・森づくり協議会・高尾の森
◎吉川　○河西

その他、常設委員会として「秩父宮記念山岳賞審査委員会」担当を黒川副会長、「海外登山助成金審査委員会」担当を古野副会長とする。（承認）

5・副会長の序列（会長）

会長不在等の場合における会務の円滑な執行を図るため、副会長の序列を名簿登載の順位の節田、黒川そして古野各副会長とする。（承認）

6・理事会の付託事項（高原）

常務理事会（構成員：会長、副会長および常務理事の7名）は次の事項について専決承認し、理事会に報告する。（承認）

①後援依頼・名義使用依頼
②ＪＡＣロゴマーク使用許可
③図書・資料の引用、貸出許可
④関係団体、支部等の開催行事への派遣役員の選任
⑤職員の人事、給与

7・事務委嘱（高原）

吉川理事に日本山岳会本部所在の千代田区四番町5番4の「サンビュウハイツ四番町」の管理組合の理事を向こう2年間委嘱する。（承認）

8・理事会への出席（高原）

柏会報編集委員長（編集人）のオブザーバー出席。（承認）

【今後の日程】

基本的に月1回、常務理事会（第1水曜18時）、理事会（第2水曜19時）開催

1・7月度常務理事会7月3日㈬19時（変則）～

2・7月度理事会7月10日㈬19時～

ルーム日誌 6月

3日　総務委員会　高尾の森づくりの会
4日　図書委員会　スケッチクラブ
5日　自然保護委員会　集会委員会　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ
6日　総務委員会　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ
10日　総務委員会　スキークラブ
公益法人運営委員会
11日　総務委員会　山岳研究所運営委員会　スケッチクラブ　ルーム検討ＷＧ
12日　理事会　休山会　山想倶楽部
13日　フォトビデオクラブ　山の自然学研究会　山岳地理クラブ
14日　総務委員会　家族登山普及ＷＧ
15日　支部長会議
17日　資料映像委員会　総務委員会
18日　スキークラブ
19日　三水会　青年部　つくも会
20日　科学委員会　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ
21日　財務委員会　フォトビデオクラブ　自然保護委員会
公益法人運営委員会　九五会
24日　総務委員会　緑爽会　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ
25日　デジタルメディア委員会
学生部
26日　フォトビデオクラブ　麗山会　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ
27日　ＰＴ・ＷＧリーダー会議
01会　みちのり山の会
28日　委員長会議　山遊会
29日　ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢ

6月来室者543名

会員異動（6月分）

物故

市川次良（5068）13・2・28
川田善朗（5893）13・6・12
神原忠夫（5975）13・5・24
石田裕康（7926）13・5・23
鹿田匡志（12719）10・12・13
山下康成（12960）13・5・31

退会

鵜野悟郎（4114）
酒井俊一（9135）
加藤秀之（9161）
西勝留美子（10706）岩手
松永　敏（11283）
村田孝嗣（12919）青森
安藤雅人（13227）
上野　瞳（13505）東京・多摩

◆創立20周年式典と第29回東北・北海道地区集会の案内

青森支部

青森支部は平成5年に設立され、20周年を迎えます。これを記念し、第29回東北・北海道地区集会を兼ねて、式典を開催いたします。記念講演では会津斗南藩や白神山地世界遺産登録その後について、山行は本州北端下北半島の山々です。ぜひご参加ください。

日時　10月12日㈯～13日㈰
会場　プラザホテルむつ
日程　■12日：式典・講演会・懇親会
■13日：東北・北海道地区集会、記念山行（A大尽山登山、B縫道石山登山、C恐山・大間周遊）
費用　1万6千円
締切　9月10日
申込・問合　須々田秀美
〒036－0103 青森県平川市本町字北柳田96－2
TEL&FAX 0172（44）7237
✉susuta@gmail.com
＊申込者に詳細案内を送ります。

◆北アルプス立山～双六岳縦走

集会委員会

北アルプス全山縦走シリーズ第2回。北アルプスの中枢部ともいえる薬師岳を中心として、盛夏を過ぎ秋めいてきた静かな稜線を楽しみます。現地集合・解散。

日程　9月6日㈮～9日㈪
集合　6日7時：室堂ターミナル
解散　9日16時頃：新穂高温泉
行程　立山～五色ヶ原～薬師岳～太郎兵衛平～黒部五郎岳～双六岳～新穂高温泉
費用　3万2千円を予定
募集　15名
申込　8月20日までに清登緑郎
TEL 090（9325）8258
✉rokurou1950@mail.goo.ne.jp

（6ページ尾上前会長のあいさつの続き）

ACの主導で連絡協議会を立ち上げました。この協議会では、運動の展開方針や山の日をいつにするか、祝日としての山の日の是非などが論じ合われました。さらには、広く一般に理解を深めてもらうための広報活動にも力を注いでいます。

この山の日の制定運動の進捗状況ですが、このほど100人を超す衆参国会議員の超党派による促進議員連盟が発足しました。聞き及んだところによりますと、来年の冒頭の通常国会に議員立法として上程されるそうです。そうなりますと、施行日がいつかは別にして、山の日の制定に目途が付いたといえましょう。ここでもJACのマンパワーが、いかんなく発揮されていることを付け加えます。

JACの会長を辞するに際し、JACの偉大さ、奥の深さ、そして、そこに集う人たちのクオリティの高さを再認識すると共に、会員の皆様に敬意を表させていただきまして、退任の御礼に替えさせていただきます。

図書受入報告（2013年6月）

編著者	書名	ページ／サイズ	発行元	刊行年	寄贈／購入別
竹内洋岳	登山の哲学：標高8000メートルを生き抜く（NHK出版新書 No.407）	205p／18cm	NHK出版	2013	著者寄贈
滝本幸夫	田中澄江が歩いた北海道の山	248p／19cm	北海道新聞社	2013	著者寄贈
打田鉄一	藪岩魂：ハイグレード・ハイキングの世界	271p／20cm	山と溪谷社	2013	出版社寄贈
石原永昌	丹沢夢風景：石原永昌写真集	19×27cm	山と溪谷社	2013	出版社寄贈
信州大学山岳科学総合研究所(編)	上高地・槍・穂高地域における自然環境の変動と保全・適正利用に関する総合研究	708p／30cm	信州大山岳科学総研	2013	発行者寄贈
全国水源林造林協議会連合会(編)	水源林造成事業50年のあゆみ	179p／30cm	全国水源林造林協議会連合会	2012	滑志田隆氏寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引（1）：北海道編	82p／26cm	佐藤勉(私家版)	2012	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引(2)：東北編（阿賀野川-阿武隈川以北）	124p／26cm	佐藤勉(私家版)	2012	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引(3)：上信越・八ヶ岳・頸城編（戸隠・佐渡・弥彦を含む）	107p／26cm	佐藤勉(私家版)	2012	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引(4)：中央アルプス・南アルプス編	107p／26cm	佐藤勉(私家版)	2012	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引(5)：北アルプス南部編（燕－常念・槍－穂高・他）	112p／26cm	佐藤勉(私家版)	2012	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引(6)：北アルプス北部編（剣－立山連峰・後立山連峰）	132p／26cm	佐藤勉(私家版)	2012	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引(7)：両白山地・関西の山編（両白・鈴鹿・紀伊・他）	130p／26cm	佐藤勉(私家版)	2012	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引（8）：中国・四国・九州編	127p／26cm	佐藤勉(私家版)	2013	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引（9）：奥多摩・奥秩父編	98p／26cm	佐藤勉(私家版)	2013	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引（10）：上信・丹沢・富士・箱根編	112p／26cm	佐藤勉(私家版)	2013	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引（11）：上越国境・魚沼・尾瀬編	101p／26cm	佐藤勉(私家版)	2013	編著者寄贈
佐藤勉（編著）	山域別登行記録索引（12）：南会津・日光・阿武隈編	111p／26cm	佐藤勉(私家版)	2013	編著者寄贈

お詫びと訂正

「山」2013年4月号に掲載いたしました「放射線と登山道」につき、一部、誤った記載がございました。ここにお詫びし、訂正させていただきます。

該当箇所：「山」2013年4月号3ページ

内容：「放射線と登山道」に関する講演会の模様がご覧いただけるサイトのURL

（誤）
http://www.jwaf.jp/yama/cgi-bin/jwaf0303.cgi

←

（正）
http://www.rousan.jp/CC_Public/
※左側ナビ「講演会」をクリック。

日本山岳会団体傷害保険
加入のおすすめ

加入対象者（被保険者）：日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい！

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

資料請求先
東京海上日動火災グループ代理店 **株式会社東海日動パートナーズ東東京**
団体傷害保険資料請求担当：藤田　Mail:a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808　FAX.0120-161-809

日本山岳会所蔵資料紹介 No.4-①

［資産番号］　10023
［資 料 名］　「蘭花譜」
［部 門 名］　絵画
［寄 贈 者］　加賀行三
［受 入 日］　1954年12月

当会への「蘭花譜」贈呈の書簡

バンダ・サンデリアナ　Vanda sanderiana

ﾚﾘｵｶﾄﾚﾔ　Lc.No.106

←ﾊﾟﾌｨｵﾍﾟﾃﾞｨﾙﾑ・ﾕｳﾌﾗｼｱ‘ｵｵﾔﾏｻﾞｷ’
Paph.Euphrasia ‘Oyamazaki’

ﾊﾞﾝﾀﾞ・ﾙｿﾆｶ　Vanda luzonica

加賀正太郎（1888 ～ 1954 年）の、幻の版画集･彩色図譜の傑作と称えられている「蘭花譜」である。学術上重要な植物図譜と、わが国の木版画の伝統技術が一体となった極めて貴重な画集だ。図譜は 104 枚から成り、84 枚は浮世絵の技法を受け継ぐ木版画、20 枚は油絵の印刷と白黒写真で構成されている。加賀は「蘭花譜序」のなかで、「蘭花譜は過去 30 年間に於ける余が温室の業績の一部の記録である」と述べ、編纂の経緯など詳細を記している。

油絵は中村清太郎、写真は岡本東洋、下絵は池田瑞月、木版の彫刻は東京の大倉半兵衛、摺師は京都の大岩雅泉堂に託した。使用する紙や顔料についても、「最高のものを」という思いから試行錯誤を繰り返し、1946 年に完成。第 1 輯として 300 部を限定刊行、そのうちの 100 部を海外の大学、博物館、美術館へ寄贈している。加賀としては世界に向け、「日本は第 2 次世界大戦で敗戦したが、誇る伝統文化は健在だ」と、発信する思いもあったようだ。

当会には、加賀の遺言により、「蘭花譜」の初刷り 1 部が小冊子「蘭花譜序」とともに寄贈された。国内において、初刷りをセットで有することは希少なことであり、相当の価値であろう。それほど貴重なものである。

わが国の最高の技術をもって編纂された画集のなかから、7～8 月号の 2 回にわたり数点を紹介する。紙面では美しい色彩を伝えることができなくて残念ではあるが、いずれ機会をみてすべてを展示・公開したいと考えている。ＨＰ（下記に詳細）からは、カラー版を見ることができる。また、加賀正太郎と「蘭花譜」については、会報「山」2012 年 6 月（805）号に詳しい。併せてご活用いただきたい。

なお、日本山岳会ホームページ→委員会活動→資料映像委員会→所蔵資料紹介へとアクセスすると、「会報ページそのもの」を拡大して見ることができます。ご活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。✉ jacshiryo102@jac.or.jp

❖編集後記❖

●関東甲信越の梅雨が明けたという日、常念岳に登った。樹林帯は蒸し暑いものの、ひとたび森林限界を越えると、ものすごい風。暴風、爆風の域。ひとりでテントを張るのに苦労していると、隣の人が手助けしてくれた。雨脚も強くなり、槍穂高も拝めず。梅雨明けと同時に、山にも青空が広がるというのは、現代の気象には通用しないのかとため息。しかしそれでも風や空気感に、夏山シーズンが始まる気配があり、1年ぶりに夏の北アルプス稜線に立ったことを嬉しく思った。今夏もまた、皆さん各地の山々へお出かけと思いますが、ぜひ夏山のレポートもお寄せください。

●6月の総会で役員改選。会長はじめ、新しい顔ぶれになりました。

（柏 澄子）

日本山岳会会報　山　818 号

2013年（平成25年）7月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　尾上 昇
編集人　柏 澄子
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社